

2019年7-9月

20190711

「コレラに勝ったのはペストだった」。

一ヶ月ほど前に、『何故ソ連は解体したか』という本を紹介した(20190610)。

その本に序文を寄せたドミトリー・ブニコフという人(どういう人かは不詳)が、人目を引くことを書いている。ソ連という国がいろんな欠陥や悪業をかかえていたことは議論の余地がない。だが、それを打ち倒したのは、同等のものというよりも、もっと悪いものだった。コレラに勝ったのはペストだったのだ、と彼は書いている。

これは比喩にしても極端な言い方で、いくら何でも言い過ぎだという気もするが、一種のショックを頭脳に与えて、ものを考えさせる意味はあるのかもしれない。今日、ソ連について何かを語るとき、そこにいかに多くの矛盾や欠陥がはらまれていたかを指摘するのが一般的常識となっている。これはいわば「コレラ」について語るということである。そのこと自体は当たっているのだが、ややもすれば「コレラがなくなってよかった」ということだけに目が奪われて、「どのようにしてなくなったのか」「その後やってきたのはどういうものだったのか」という問題が見失われがちであるように思われてならない。

近年、ロシアやハンガリー、ポーランドその他の国について「民主化の後退」「権威主義の強靱性」ということが言われだし、政治学の世界では一種の流行にさえなっている。だが、民主化がいったん進んでから後退したのか、それとも、そもそもの「民主化」自体にある種の問題性が潜んでいたのではないかという論点はあまり意識されることがない。ソ連体制(コレラ)をなきものとするのはよいとして、「どのようにしてなくしたのか」という問題が等閑視されてきたのではないだろうか。

今日の状況が「ペスト」そのものだとまでは思いたくない。だが、ロシアその他の旧社会主義諸国だけでなく、「典型的な民主国家」と思われてきた西欧諸国でも、そしてアメリカや日本でも「民主主義の危機」が指摘されている今日、かつての「コレラ」撲滅がどのような形で行なわれ、何がそれにとって代わったのかを反省的に考え直す必要があるのではないか。さもないと、過去のコレラ患者のことを嘲笑っている間に、いつのまにかペストがやってきたということになりかねない。

20190718

「左派ポピュリズム」?

「ポピュリズム」という言葉は古い歴史をもっているが、近年、改めて一種の流行現象(現実政治においても、言論の世界でも)となっている。そうした中で、ポピュリズムの一類型として「左派ポピュリズム」に注目する議論も現われてきた。今年になって、シャンタル・ムフの『左派ポピュリズムのために』(明石書店、2019年)という本も出た。私はこの言葉にはじめて接した時、ヨーロッパのいくつかの国ではそうした動きがあるらしいが、日本でそれに当たる動きはほとんどないのではないかという気がした。しかし、最近になって日本でも左派ポピュリズムが登場したように感じる。山本太郎と「れいわ新選組」が

それである。具体的な実情はよく知らないが、一部の支持者の間では相当熱気を帯びた応援運動が高まっているようだ。もっとも、それが全社会的に見てどの程度の広がりをもつかはまだ分からないとしか言いようがない（参議院選挙の結果を見れば、単なる線香花火にとどまったのか、それを超えるものをもったのかが判定されることになるだろう）。仮にある程度以上の勢力になった場合、それが今後どのような方向に向かって行くのか、それをどう評価すべきかも微妙である。いまのところ、その行動様式ないしスタイルには注目すべきがあるが、現実の政策についてはどの程度の説得力があるのか判定しかねるところがある。いずれにしても未知数の要素が大きいと、とにかく注目に値する動きではあるだろう。

話を飛躍させることになるが、100年前にロシア革命の主演となったボリシェヴィキも、ある意味では左派ポピュリズムの遠い先駆だったと見られる面があり、その歴史を知る者として、これを手放しで賛美することにはためらいがある。ただとにかくある範囲で強い支持を集めているらしい動きである以上、その成り行きは注視に値するだろう。

（追記）今では覚えている人も少ないだろうが、かつてイタリアの歴史家フランコ・ヴェントゥーリがロシアのナロードニキについて書いた古典的大著（1952年刊）は、*Il populismo russo* というタイトルになっていた（若き日の和田春樹に大きな影響を与えた本であり、荒畑寒村『ロシア革命前史』の種本だという話を聞いた覚えがある）。それ以来しばらくの間、英語圏でもロシアのナロードニキを *populists* と呼ぶ用語法が広く行なわれていたことがある（ある時期から、*narodniks* という表現の方が普通になったようだが）。もちろんナロードニキとボリシェヴィキは明確に異なる潮流だが、見方によっては広い意味での左派ポピュリズムの遠い先駆とも見られるという点では共通しているかもしれない。

20190722

4月25日に連合赤軍事件についての書き込みをした（それ自体を正面から論じるというよりも、むしろそれと向き合うことの難しさについて主に書いた）。

その延長上で、このほど大泉康雄『あさま山荘銃撃戦の深層』（小学館、2003年〔後に講談社文庫から上下2分冊として再刊〕）という本を読んでみた。この本で中心的に取りあげられている吉野雅邦という人は連合赤軍幹部の一人で、無期懲役刑を言い渡されて現在も服役中だが、東京都立日比谷高等学校で私の一年先輩だった。著者の大泉康雄は小学校・中学校を通じて吉野の親友であり、進学先が分かれた高校・大学時代もかなり密接な交友関係を保っていた——但し、いわゆる活動家仲間ではなかった——ようだ。1970年に著者は大学を卒業して社会人となり（小学館勤務）、他方、吉野はほぼ時を同じくして非合法活動にのめり込むようになったため、2人の接触は一時的に途絶えたようだが、1972年2月にあさま山荘事件が起きると、当時週刊誌の記者だった著者はこの事件の取材に携わり、同時に、その取材対象の中心人物の一人が長年の親友だったことに深い衝撃を受けたらしい。それ以来、長い年月をかけて調査を続けてまとめ上げたのが本書である。

週刊誌の記者というと、私などには悪い先入観があって、ひたすら売らんかな主義で、安っぽいセンセーションリズムをあおり、上っ面をなぞるような安易な文章を書き散らかすといったイメージが思い浮かんでしまうが、本書を読むと、著者は相当真面目な人のよう

であり、本書も丁寧な調査と深い省察を踏まえた書物だという印象を受けた。著者と対象の関係が密接だったことと著者自身の資質とがあいまったのだろう（なお、小熊英二『1968』のうちの連合赤軍の章では本書が重要な情報源として活用されている。この章が同書の中で相対的に優れた部分になっているのは、大泉著をはじめとする有用な典拠に恵まれたおかげではないかと思われる）。

私は吉野と同じ高校にいたとはいえ、学年が違うこともあって、彼と直接つきあう関係にはなく、顔と名前を一応知っている程度だった。その彼がああいう事件の中心人物の一人だったということをマスコミ報道で知り、信じられない思いをいだきながら、ずっと「あれはどういうことだったのだろうか」という疑問をいだき続けてきた（実は、吉野の曲折した活動経歴の一局面では意外に近いところにいたこともあったのだが、その事実も数十年後にはじめて知った）。私のように浅い縁でもずっと頭に引っかかるくらいだから、子供時代からの親友だった大泉にとっては、吉野の軌跡をたどるという課題は胸の深いところに突き刺さるものだったと推察される。事件から30年を隔てて600頁を超える大著を書いたという事実がそのことを物語っている。本書は大量の資料（非公開の裁判資料や大勢の関係者への聞き取りを含む）を用いて様々な事実を明らかにしているが、ここでは、必ずしも事件の本筋ということではなく、「おや、こんな面もあったのか」ということを感じさせるいくつかのエピソードを断片的に紹介してみたい。

吉野雅邦の2歳年上の兄は仮死状態で生まれたため脳に損傷を受け、12歳の時から知的障害者のための施設で暮らすようになった（本書刊行時までそのまま）。この兄と雅邦は深い情愛で結ばれていたことが各所で語られている。なお、余談だが、兄が入所している施設の創立百周年（1992年）に当時の天皇・皇后が施設を訪問し、（おそらくあの事件に関与した人の身内とは知らずに）この兄とも言葉を交わしたとのこと。

連合赤軍最高指導者の一人である板東国男の父親はあさま山荘事件の最中に自殺したが、その少し後、蒲田警察署の署長が吉野の実家を訪れ、「板東の父親は死んでお詫びをした。あなたは、どう責任をとるのか」と雅邦の父親を詰問した。まもなく、その父は54歳で会社を辞職した。それ以外のこともあって、雅邦の両親は心身とも極度に辛い状況に追い込まれたようだが、この両親と親交を結んでいた著者は彼らが長い時間をかけて立ち直ったことにも触れている。

この事件に関わる判決としては、いわゆる「統一公判組」への判決文のなかに、永田洋子について「女性特有の執拗さ、底意地の悪さ、冷酷な加虐趣味」という女性差別をあらわにした文言があったことがよく知られており、上野千鶴子らによって批判されている。だが、吉野は分離公判を受けたため、別の裁判長によって異なる判決を受けた。その裁判長は、死刑ではなく無期懲役の判決を言い渡した後、被告に異例の訓戒の言葉をかけた。「裁判所は被告人を法の名において生命を奪うようなことはしない。被告人自らその生命を絶つことも、神の与えた生命であるから許さない。被告人は生き続けて、その全存在をかけて罪をつぐなってほしい」（自殺が言及されているのは、その前に森恒夫が獄中自殺したことを念頭においたもの）。死刑にせよ自殺にせよ死ぬことは逃避であり、生き続けて悔い続けることこそが最もふさわしいつぐない方だという考えだろうか。なお、この裁判長は退官後に弁護士となり、オウム真理教事件について発言したり、服役中の吉野と文通したりしているとのこと。

金子みちよ（吉野の恋人であり、事件の中で、彼自身を含む人たちによって殺された）の親に会いに行ったときのこと。事件後まもない時期に行ったときは、著者が吉野の友人だと知って怒りを抑えきれぬ母親に返す言葉もなく引き揚げた。それから四半世紀を隔てて再び面会を依頼して、ようやく会ってもらったとき、母親は次のように語った。「もう遠い昔のことですから、吉野君のことを恨んでもいませんし、何とも思っていない。時代というか、当時は特殊な状況だったでしょう。毎年、命日とお盆の頃になると、吉野君から御香料とていねいなお手紙をいただくんですが、分かってはいても、そのたびにドキッとしますね。……家では事件のことをいっさい口にしないようにしています。お父さんが吉野君の裁判に証人として出たあとも、『先頭を切って（同志殺害を）実行したわけではないから、究極の刑にしなくてもいいのではないかと証言してきたよ』と言ったっきりで、その後も事件のことを話題にしたことはありません」。

20190727

私が FB 上でつながっている人たちは、大まかな意味で「リベラル左派」ともいうべき人たちが相対多数だが、それ以外に、「極左」的な感じの人や、「やや右寄り」の人もいる（ここで使った「リベラル」「左派」「極左」「右寄り」などの言葉はどれも便宜上のレッテルに過ぎず、厳密な分類用語ではないが）。SNS の弊害として、似通った考えの人たちとばかりつながって、自分たちだけの世界に閉じこもってしまいがちだということがよく指摘されるが、私の場合、このような広がりをもっているのは悪くないことだと感じる。相対多数の「リベラル左派」にしても、決して一枚岩ではなく、いくつかの論点をめぐって意見を異にし、時として激しく論争しあったりしている。

そこまではいいのだが、SNS の一般的傾向として、大半が短文であるせいもあって、自説を丁寧に説明して他者を納得させるというのではなく、「こうに決まっている」とか「こんなことも分からない奴は馬鹿だ」といった感じの書き込みが多いのは辟易させられる（こうした傾向は特定の立場と結びついているわけではなく、どの立場の人にも同じように見られる）。たまには、日頃の自分の発想と異なる見解に接して「なるほど、こういう見方もあるのか」と教えられる思いをすることもないではないが、そういう機会はどこらかという稀である。「リベラル左派」内部での論争についていえば、緩やかな意味での共通項があるのだから、共通の土俵をつくって建設的な論争をすることもできそうな気がするのに、なかなかそうはいかないようだ。異なる意見を持つ人たちのあいだでの理性的討論とか対話というものは、一般論としては多くの人が主張するものだが、実際には「言うは易くて行なうは難い」ものの典型なのかもしれない。

20190730

ここ数日、歴史学界隈で SNS 上の論争めいたものが展開されている。その発端はドイツ史に関する新書本を歴史家ならぬ文学研究者が書いたことにあり、その本の記述があまりにも粗いということを当該テーマの専門家が指摘した。この批判が当たっていることは誰もが一致して認めているようだが、それとは別に、こういう批判の仕方は如何なものか、

もっと他に考えるべき点がありはしないかといったことをいろんな人が書いて、百家争鳴状態である。私自身は問題の本をまだ読んでおらず、詳しい事情が分かるわけではないが、他の人たちのFB上の書き込みへのコメントで多少の感想を述べた（特に、ロシア史畑から積極的にこの問題に発言している池田嘉郎氏のFB）。ここでそれを繰り返すことはしない。

この件をきっかけに、ある別の事例を思い出した。大分前の話だが、ソ連史とは縁の遠い分野の研究者がソ連史をテーマとする論文を書いたことがある。その趣旨はおよそ以下のようなものだった（古い話なので、記憶が多少不正確になっているかもしれない）。曰く、スターリン時代のあまりにも大きな暴虐を日本のソ連研究者はこれまで無視してきた。そのため、一般の日本人もそのことを知らずにいる。そこで自分はこの問題を解明する。（以下、数冊の英語文献に依拠した叙述が続く）。結論としてスターリン時代の犠牲の規模はあまりにも大きかった。そのことについて日本のソ連史研究者が沈黙してきたのは驚くべきことだ、云々。

これを読んで私は猛烈に憤慨した。専門外の人が口を出したからではない（それはむしろ歓迎すべきことだ）し、ソ連史の汚点を暴露したからでもない（それは当然のこと）。私を驚かせたのは、「日本のソ連研究者はこれまでこの問題を無視してきた、そのため一般の日本人もそのことを知らずにいる」という乱暴な決めつけである。菊地昌典の『歴史としてのスターリン時代』が出たのはそれよりも何十年も前のことだったし、ソルジェニツィンの『収容所群島』やコンクエストの大テロル論も既に訳されていた。私自身もスターリン時代の犠牲の規模に関する論文を書いたことがある。だから、この論文の前提的な認識はまるででたらめである。いわれなき誹謗中傷（いうまでもなく、ソ連についての誹謗中傷ということではなく、われわれソ連史研究者に対する誹謗中傷）だと感じた。

その論文の筆者はかなり年配の人で、おそらく若い時期に左翼経験を持ち、ある時期に「裏切られた」という感覚を懐いて、それ以来一種のトラウマを抱えていたように見える。まるで違う分野の研究者なのでソ連史を学ぶことはせず（ロシア語もできないらしい）、発言もしてこなかったのだが、そのトラウマをずっと引きずってきて、あるとき突然書いてみようと思いたったらしい。そういう人の書いたものが非常に粗いこと自体は、ある意味でやむを得ないことである。また、トラウマをかかえた人が非合理的とも見える叫びを上げるのも無理からぬところがあり、それ自体を非難しても始まらない。ただ、その論文はある集团的著作に収録されたのだが、どうして周囲の人がこういう論文の収録を容認したのかが不思議だった。編者たちは私の知らない人ばかりだったが、多少間接的関係があるかもしれない人にメールを送って、どうしてこんなことが起きたのかと尋ねたところ、返事が来なかった。おそらく他言をはばかりなデリケートな事情があるのだろうと思って、それ以上は追求せず、放置した。

今回の新書本がこの事例とどの程度共通性があるのかわからない。おそらくあまり大きな共通性はないのだろうと思う（というか、そう信じた）。ただ、現代史というのはどうしても多くの非専門家たちの胸を騒がせてしまうところがあり、いろんな感情のこもった論争に引きずり込まれやすい。専門の歴史研究者はそうした感情的論争から距離をおいた分析を心がけるが、そういう態度をとること自体が批判にさらされたりもする。このように一般化する限りでは、いま紹介した事例と今回の本はある程度まで類似の文脈

の中にあるのかもしれない。

20190803

数日前からモスクワに滞在している。去年来たときは3年ぶりだったので、いろんな変化が目についたが、今回は前回から1年しか間隔があいておらず、あまり変化がない。そのため、FBに書くようなこともそれほど多くはない。

【レーニン図書館（本館）】。入り口前の大きな広場のようなところが大規模工事中で、ぐるっと大回りしないと玄関にたどり着けない。昨年、ソ連官報の欠号の探索について書いたが、館の法令資料室でも欠号になっていた。しかし、係員が官報に載るようなものはみなデジタルのデータベースにあるから、何月何日のどういう決定かと尋ねるので、これこれと答えたら、コンピューターの画面に当該決定が出てきて、それをプリントしてくれた。現物が見られない代わりだとか言って、プリント代は無料だった。親切な対応ではあるが、デジタル・データさえあれば紙媒体の官報は行方不明でもかまわないという考えなのだろうか。

【公立歴史図書館】。長いことかかっていた大規模改修がとうとう完了し、昨年まだオープンしていなかったビュフェも営業を開始した。おかげで、昼食時に外に出ないで済むのはありがたい。それとは別に、私がよく使う定期刊行物室の一部が大幅模様替えのための改修工事で、いつもと大分勝手が違う。

館内にウォーターサーバーが設置されている。空気が乾燥しているので、自由に飲用水〔ミネラル・ウォーター〕が飲めるのはありがたい。

中庭のキオスクにあった本屋は営業していない。もう改修工事は終わっているのに、再開するつもりがないのか。規模は小さくとも歴史関係図書をコンパクトにまとめている、大変便利な本屋だったのだが、このままなくなってしまうのかと思うと残念だ。

【レーニン図書館ヒムキ分館】。この分館については、昨年やや詳しく書いたが、今回は特に新しく付け加えることはない。

20190807

モスクワ雑感。

ロシア＝グルジア関係が一時改善した後に最近また悪化したということなので、スーパーマーケットの酒売り場を覗いてみたところ、グルジア・ワインは普通に売られていた。昔の最盛時に比べると少なめかもしれないが、少なくとも禁輸時代に逆戻りということはないようだ（そういえば、モルドヴァ・ワインは禁輸が解けた後も、市場における他国との競争に負けて、ほとんど回復していないという話を聞いたことがある。確かに、モルドヴァ・ワインは全く見かけることがなく、それに比べるとグルジア・ワインは健闘している）。グルジア料理店も結構あちこちで見かけた。少なくとも、2008年のグルジア＝ロシア＝南オセチア戦争直後の極度に険悪な状態に比べると、一応は安定しているように見える。

都心で土産物屋をひやかしてみたら、肖像などで一番人気が高いのはレーニンとプーチン

で、スターリンはあまりなかった。数年前まではもっとずっとスターリンが多かったような記憶がある。

地下鉄車両に設置されている非常用消火器を見たら、商品名が「サムライ」とあった。地下鉄プラットフォームの掲示に、「ラッシュアワーにはエスカレーターは両側に並びましょう」というのがあった。もともとモスクワでも片側を空けるのが一般的習慣だったが、この頃は違う考えが出てきたのだろうか（わざわざ呼びかけるからにはまだ定着していないのだろう）。

20190810

今日は週末なので、定例の反政府デモがあるかと思って、都心を少しぶらついてみたが、時間帯が違ったのか、それらしい場面には出くわさなかった。警官はいつもよりは多めのようにだったが、とりあえず待機ということだったのか。赤の広場から無名戦士の墓の方に向かうあたりで、機動隊風の制服を着た警官が数人歩きだしたので、試しに後をつけて行って見たが、「いざ出動」というような緊迫感はなく、のんびりと歩きながら、どこか遠くの方に行ってしまった。マネージュ広場のところにある地下鉄出入口のあたりには数人の警官（これも機動隊風）がいたが、「不穏分子」が出てきたときに備えているのかもしれないが、当面は手持ち無沙汰といった感じだった。

1991年8月のクーデタ時にモスクワに居合わせたときもそうだったが、何かの事件のときにたまたま現地にいる人間というのは、自分が居合わせている地点のことしか目に入らないわけで、他の個所でどういうことが起きているのかはあまりよく分からないことが多い。今日も、私が見るところのできなかつた地点・時間帯に何かがあったのかもしれない。話が変わるが、地下鉄の改札口の手前あたりでセキュリティ・チェックに当たっている警官の態度が以前よりも物柔らかくなっているような気がする。以前は、いかにも「人を見たらテロリストを思え」といわんばかりの鋭い目つきでにらみつける人が多かったのが、この頃は、「セキュリティ・チェックにご協力お願いします」「ご協力ありがとうございました」という人が多い。ロシアの警官にスパシーバと言われるとは予期していなかったので、軽く驚いた。こういったソフトな警備をする人たちと、デモ隊鎮圧のために重装備で出動する人たちとは警察の中でも異なった部署に属しているのだろう。ソフトな警備とハードな警備を使い分け、後者はあまり大勢の人の目には触れないようにする（それでも現場にいた人がスマホで撮影して、インターネットに投稿すれば世界中に知れ渡ってしまうわけだが）といった構造はどこかの国でも似ているのかもしれない。

20190817

「表現の不自由・その後」展について。

この問題については大勢の人がいろんな発言をしているが、展示がほんの数日で停止されたために実地に見た人はあまり多くなかったという事情も関係して、そもそも問題の展示はどういうものだったのかという点に関する理解もずいぶんまちまちであるような気がする（なお、展示全体は多様な要素からなっていたようだが、ここでは最大の物議を醸した

「少女像」の問題に絞る)。

かなり多くの人たちの理解によれば、この像は日本および日本人を世界の中でも例外的な極悪行為を犯した人々として糾弾し、土下座を迫るものだというようなイメージで受け止められたようだ。そうだとすれば、政治的圧力による中断まで正当化されるかはともかく、「あまり趣味がよくない」「自分は見たくない」「政治的思惑だ」「芸術性に欠ける」といった感想が出てくるのも自然なところがある。

私自身も現物を見たわけではなく、新聞などに載った小さな写真をちらと見ただけなので、最初のうちあまり立ち入った理解を持つことはできずにいた。しかし、ある程度時間が経過するうちに、実地に見た人たちからの詳しい報告があらわれ、そこではかなり違ったイメージが提出されている。

少女像のかたわらにおかれた銘板には「平和の碑」建立の経緯の説明が書かれているが、これはごく短い文章である。もちろん、その背後にはいろいろな考え方が込められていたことが想定されるが、それ自体は簡略な経緯説明にとどまるため、読む人はそれぞれの角度からいろんな読み方をすることができる。つまり、そこにどのような意味を読み取るかは、見る人の想像力に委ねられている。主たる糾弾対象が日本政府なのか、日本人全般なのか、あるいはこの問題を長らく放置してきた韓国政府あるいは韓国人男性なのか、問題は日本と韓国の間にあるのか、それとも国や民族と関わりない性差別こそが問題なのか、その他いろんな解釈の余地がある。

銘板よりも重要なのは像それ自体だろうが、この少女は泣き叫んでいるわけでもなければ、怒り狂っているわけでもなく、ただ静かに座っているだけである。彼女は何かを考えているようだが、何をどう考えているかは、見る人が様々に解釈することができる。実地に展示に赴いた人の観察によれば、多くの来場者は静かに作品を鑑賞していたとのことで、「拍子抜けするような作品だった」という感想を洩らした人もいるという。なお、この作品をつくった人は、別の作品では韓国のベトナム戦争への加担のことを取りあげており、日本だけを糾弾しているわけでもなければ、韓国を全面的な善としてるわけでもないようだが、そういう知識はこの像を見る人誰もが持っているものではないので、作品の評価にそれを前提することはできないだろう。そういうことに関わりなく、人それぞれに自分流の見方をすることができるようになってきているということである。

少女の足下から床に延びている影は老女の姿のように見える。この少女と老女の間をどう読み解くかも見る人の想像力に委ねられている。なお、いわゆる「慰安婦」の多数はそれほど若い少女ではなかったという指摘があり、このような年少の少女に代表させるのは不適切だという意見がある。それはそうなのかもしれないが、《少女像および老女の影》という組み合わせの意味もいろんな解釈が可能であり、慰安婦はみんな年端もいかない少女だったという主張がストレートに打ち出されているわけではない。重要なのは、少女の横にもう一つの椅子があって、そこに観客が座ることができるようになってきている点である。そこに座った人は、すぐ隣にいる少女のことをごく近い存在として感じつつ、もろもろのことに思いを馳せることができる。

まとめていうなら、少女が絶叫しているわけではなく、ただ静かに座っていること、そしてその横に椅子が置いてあるという2点が、この作品の重要な特徴であるように思える。そのことは、「あなたも一緒に考えてみませんか」という呼びかけを主要メッセージとし

て含むもののように思える。だが、考えた上でどういう結論を出すか——悪いのは誰か、誰がどのような責任を負うべきか、これからどうすべきか等々——については、特定の結論が一義的に指示されているわけではない。

ところが、このような像のことを、丁寧に観察する作業抜きに「きっと、むやみな反日攻撃なのだろう」と想像する人がわりと多いように見える。そのような想像は、①韓国人はみなひたすら反日攻撃をしたがっているのに違いないという思い込み、②「慰安婦」という言葉を聞いただけで、痛いところを突かれたような気がして、猛烈な勢いで反論したくなる心性、という二点を背景としているのではないだろうか。だとしたら、そのこと自体が大変悲しいことだと感じる。

(言わずもがなの蛇足)。韓国人の中には「慰安婦」とか「徴用工」といった話題をむやみな反日攻撃のために利用しようとする人たちも一定数いることはおそらく事実だろう。だが、だからといって韓国人はみなそういう人ばかりだと決めつけるのは、日本人の中に「嫌韓」論を煽るネトウヨがいるからといって、日本人はみなそのような人間ばかりだと決めつけるのと同様の発想に立つことになる。

20190904

立ち読みした本。

書店で『『罪と罰』を読まない』という本が目に入った。職業として文学に携わっている人が超有名な古典的作品を読んでいないというのはなかなか大声では言えないことだが、世の中には「超有名な古典的作品」というものが無数にある以上、ある意味では不可避でもある。この本の著者たち(岸本佐知子・三浦しをん・吉田篤弘・吉田浩美の四人)はこれまで『罪と罰』を読んだことがなかったということのカミングアウトした上で、読む前の段階、一部読んだ段階、全体を読み終わった段階でそれぞれ座談会をするという趣向のようだ。パラパラと頁をめくって立ち読みしただけだが、なかなか面白そうだという気がした。

特に眼にとまった点の一つあった。読んだことがなくても何のイメージもないわけではなく、「たしかラスコなんかという人が主人公で、どうも老婆を殺したらしい」といった程度の知識はみな漠然と持っている。ところが、読んだことがあるという人たちにどういう本だったかを尋ねてみると、「ずいぶん前に読んだのでよく覚えていないけれど、たしかラスコなんかという人が主人公で、どうも老婆を殺したらしい」といった答えが返ってきて、「読んでいない」と「読んだことがある」の差は紙一重ではないかといった話が出てくる。これは、「読む」とはどういうことなのかという問題を考えさせる点で、ピエール・バイヤール『読んでいない本について堂々と語る方法』を思い起こさせる。

今ここに私が書いている文章は、「読んだ」でもなければ「読んでいない」でもなく、「立ち読みでパラパラと(おそらくかなり不正確に)読んだ」という話である。これを本書自体やバイヤール著の議論と比べてみるのも一興かもしれない。

(蛇足) 法学者の間では、タイトルを『罪と罰』とするのは誤訳で、正しくは『犯罪と刑罰』と訳すべきだという有力な主張がある。『桜の園』を『チェリー畑』と訳すべきだという説と同様、いくら正しくても、あまり広くは受け入れられそうにないが、たまにはそ

ういうことを考えてみるのもちょっと面白いかもしれない。

20190909

先日亡くなった故・池内紀の絶筆とおぼしい書評が東京新聞ウェブで読める。

<https://www.tokyo-np.co.jp/article/book/shohyo/list/CK2019090102000166.html>

ローベルト・ゼーターラー『ある一生』という小説の邦訳の書評である。その冒頭に次のようにあるのが眼にとまった。

「訳者はタイトルで手こずったのではあるまいか。オリジナルは「ある」と「一生」のあいだに全体を強調する強い語が入っている。どう訳しかえてもピッタリこない。やむをえず、それは読者にゆだねることにした。正しい選択である。読み終わって、あらためて迫られて、はたしてこの一生を何と言えればいいのだろう？」。

原題は *Ein ganzes Leben* とのことなので、*ganzes* という形容詞を略したことになる。これは相当大胆な決断である。ただの「ある一生」ではなく、それを強く形容する言葉が入っているのに、それを略すというのは、口やかましい批評家からの批判を招かずにいないことが当然予期される。その決断に対して池内は「正しい選択である」という評価を与えている。

これを読んで、何となく成る程という気がした。池内は『ヒトラーの時代』における多くの間違いを指摘されただけでなく、専門であるドイツ文学の翻訳に関しても種々の批判にさらされてきた（詳しい事情は知らない）。おそらく池内はそのような批判は百も承知の上で、あえて、「どう訳しかえてもピッタリこない語については読者に委ねる」というような訳し方をしてきたのではないか。このことは、「翻訳とはどういうことか」という問題を考え込ませる。

話を広げることになるが、ある高名な社会学者（うろ覚えなので実名を挙げるのを避ける）が、自分は翻訳をするときに原文を横に置くことをしないと書いているのを読んだ覚えがある。原著者の言わんとすることは自分の頭の中に入っているので、それをできるだけ分かりやすい日本語で表現すべく、自分の文章として訳文を書いていくのだという。この話を別の（有名な古典的著作の新訳を出した人）にしたところ、自分もどちらかというところ、そういう方式をとる、そのため一字一句を原文と照らし合わせる人たちから誤訳とか脱落を指摘されるが、そういう訳し方しかできないのだというような返事だった（これも実名は避けるが、亀山郁夫氏ではないということだけ断っておく）。

私自身は滅多に翻訳はしないし、「原著者の言わんとすることは自分の頭の中に入っている」といえるほど強い自信を持っているわけではないが、自分の著作の中で何らかの資料の紹介をするときに、原文をそのまま訳したのでは意味がうまく伝わらないのではないかと、思って苦慮することはよくある。多くの場合、直接話法での紹介を避け、「大体このような趣旨のことが述べられている」といった書き方をするようにしているが、その場合でも、解釈の正確さについて争われる余地は残る。

丁寧なやり方としては、（田川建三が新約聖書についてしたように）大部の「訳と注釈」（注釈の方が訳文の何倍もの分量になる）を先ず刊行して、それから訳文のみをハンディな一冊にまとめるという手があるかもしれない。ドストエフスキーとかパスカルとかカフ

かなら、そういうやり方もできるだろうが、歴史家がよく使うような、文学的味わいのまるでない散文的資料（しかも、往々にして文章に筋が通っていなかったり、当事者が自明とみなしている背景を補わないとまるで意味が分からなかったりする）を大量に読んで、そのさわりを紹介するという場合には、とても一々そういう丁寧なことをしてはられない。

話が逸れすぎたが、翻訳（資料紹介を含む）とは一体どういうことなのか考え込まれる。ここには、「横のものを縦にする」だけでは済まない複雑な問題が横たわっているように思う。

201909013

「オオカミ少年（老年）」の失墜の後に。

今から何十年も前にさかのぼるが、戦後日本で自民党長期政権下の諸政策や社会の動向に批判的な人たちは、しばしば「ファシズムがやってくる」「この道はいつか来た道（戦前体制への復帰）」「戦争がやってくる」等々と叫んでいた。その叫びが十分正鵠を射ていなかったことから、彼らは次第に「オオカミ少年」と見なされるようになり、威信を失墜した。

そういうことが長らく続くうちに、今やかつての「オオカミ少年」は「オオカミ老年」となり、ますます威信を失っている。おそらく若い世代にとって彼らは嘲弄の対象でしかないのだろう。そこには自業自得の要素があるのかもしれない、そのこと自体を嘆いても始まらないのかもしれない。

だが、気になるのは、そうやって「オオカミ少年（オオカミ老年）」がすっかり失墜した今頃になって、オオカミそのものではないにしても、それにある種類似した別種の危険がやって来たりすることがあるのではないかということである。にもかかわらず、そのことに警告を発しようとする人たちは、「またしてもオオカミ老年の繰り言か」とあしらわれてしまうような時世のように思われてならない。

オオカミそのもの（古典的なファシズムと戦争）ではない「別種の危険」とは何かということを見定めることは難しく、それを防ぐ適切な道もなかなか見出しがたい。そのことが情勢の暗さを倍加している。ただとにかく、「オオカミ老年」のことを「何をいつまでも馬鹿馬鹿しいことを言っているのだ」と嘲笑っているうちに別の危険に見舞われてしまうなら、笑ってばかりもいられないのではないか。